

にサイソンは何度も感動していることが述べられる。そう、工業化によって汚された都会に長らく住んでいたサイソンにとって、この森や林や花や木々や小川や動物や小鳥たちのいる（ある）所は、まさに楽園なのである。しかしそこは彼にとっては一種の禁断の場所である。彼は「侵入者」として描写され、森の小道を通ろうとすると森を守っている森番に威嚇され、阻止される。しかし結局は彼は森の小道を歩いて、ヒルダに出会う。森番のアーサー・ピルビームは、現在はヒルダの恋人であり二人は深い関係になっていて、いずれ結婚する予定なのであった。ヒルダの住んでいる家へ行くには森を抜けて行くのが早道なのであるが、そこにはアーサーがいてすんなりとは通ることができなかったのである。森には桜草やヒアシンスを初めとして様々な春の花が咲き乱れているのであるが、中でも見事な描写をされているのがブルーベルである。森一面に咲き誇るブルーベルは青い河であるかのように、洪水となって森に溢れている。そこに緑色の道が一本走り、曲がりくねっていて、サイソンは何度も立ち止まっては美しい光景のため息をつく。死者が死んだとき三途の河を渡らねばならないが、サイソンはブルーベルという美の河を渡ることになるのであり、渡し守はアーサーなのである。そして渡った先には黄泉の国があるのだが、これは「地獄」ではなくて「楽園」である。サイソンはそこでは亡霊である。原文ではサイソンのことを「死んだような青白い光を放つ」顔をしていると書いている箇所があるし、また彼にとってこの楽園が「地獄のよう」であるとも書かれているので、題名の“The Shades”と言う言葉は、まさに、の意味を兼ねていると考えて良いであろう。サイソンは、その黄泉の国で、昔とは違って女らしくなったヒルダに出会う。彼女は、今はサイソンではなくてアーサーを愛している。彼女は性的な魅力に溢れ、この楽園の女王であるかのようなのである。そして森番アーサーは、『白孔雀』や『チャタレー卿夫人の恋人』に登場する森番と同じく、都会的な存在には嫌悪を示すのである。サイソンは、この黄泉の国（楽

園）では異邦人である。

以上のように *The Shades of Spring* という題名には、ロレンスが他の多くの作品でも書き続けたきた野生的な男性の肯定と、都会的なことに価値を求める男性に対する批判という主題が込められているのである。言葉の意味を慎重に考察したとき、一見すると否定的に思われる題名が、実は肯定的な意味を背後に含んでいるということに、読者は驚嘆し喜ぶであろう。そしてロレンスがどんなに言葉使いに繊細で慎重な作家であったかを悟るであろう。

## 語学の季節

法学部  
鈴木 清貴

信じてもらえないかもしれないが、大学院生だった頃、六法より外国語の辞書を開いている時間のほうが、間違いなく長かった。周りの院生も似たり寄ったりの状況で、だから、本がばらばらになってしまうほど辞書を引き、辞書を何冊つぶして、何回買い換えたかが、院生たちのひそやかな矜持となるような時代だった。いまの法科大学院はまだなくて、あるのは法学研究科だけだった時のことである。

語学にそれまで意識を向けてこなかった平均的な法学部生（私）が、法学研究科に入り、語学の風に、ときに嵐のように強く、吹かれることになった時の話をしよう。加藤登紀子さんの『時には昔の話を』の旋律に乗せたつもりで、いくつかのエピソードを語ろう。

## ドイツ語と「あんみつ」

「でいい あんとしゃいどうんぐ・・・」。私のぶざまなドイツ語の発音が横浜の一室に響いた。

円谷峻先生は、「夏休みにドイツ民法の勉強会をするから」と、非常勤先の教え子である私を誘ってくださった。大学院に入った年のことである。先生の本務校の院生たち（現在、私の担当する専門演習と合同ゼミ合宿をしてくださる仲間たち）と、「フォン・ケメラ『私法における因果関係の問題』(Ernst von Caemmerer, Das Problem des Kausalzusammenhangs im Privatrecht)」を読むことになった。そのときはよく知らなかったのだが、ドイツの不法行為法に関する名論文（講演録）である。ドイツ語にはじめて接することになった私は、ドイツ語の発音・文法を急ぎ独習し、偉大なケメラ論文に捧げるにはふさわしくない日本語訳をやっとの思いででっちなあげ、勉強会にのぞんだ。

円谷先生の文献講読会では、指名された院生は、一文ごと音読をし、その後、準備してきた和訳を参照することなく、その場で翻訳をすることが求められる。私の「でいい あんとしゃいどうんぐ」は、「die Entscheidung」のことで、ドイツ語で、「決定」とか、「判決」とかを意味する。発音は、すかさず、「ディー エントシャイドウング」と、円谷先生によって訂正された。

当時、指導教授の池田真朗先生の影響で、フランス語にも染まり始めていた私は、「die Entscheidung」中の「En」を鼻母音としたのであった。ドイツ語の面でも、フランス語の面でも完全に失敗をしてしまった。どちらもよく理解出来ていれば決して間違えたりはしない。注意を受けた私は舞い上がり、ついでに翻訳でも躓いてしまった。時間がかかるので、訳の途中で円谷先生はCD-ROMによる判例検索を始められた。焦る私。どうにかこうにか訳し終わった。「え？ もう一度？」。同じ文を訳し直すように言われた。教育効果を狙ってのことだろうか。先生はたぶん聞いていなかったのだと今でもそう思っている。

そんなこんなで勉強会は3日間にわたるのだが、

途中にリフレッシュの時間がある。お昼を食べたり、お茶・おやつがあったりの楽しい時間で、もちろん最終日にはお酒もある。みんなが横浜のシュウマイ弁当を食べている時、一人だけ幕の内弁当になってしまった円谷先生が、院生にシュウマイを上納させて、もともとシュウマイ弁当に入っているシュウマイの数より多くのシュウマイを手にしてみせることもあった。ドイツ語初心者の私は、ときに円谷先生に激励された。発破をかけていたきながら、喫茶店で、先生がする注文に合わせて一緒に食べた「あんみつ」が、今も忘れられない。

## フランス語の宿題

大学院時代も半ばを過ぎた頃のある夏休み、指導教授の池田真朗先生から、フランス銀行協会による「ダイイ法 (Loi Dailly・フランスの債権譲渡に関する法律)」についての報告書を読んでみようとお誘いを受けた。毎週1回くらいのペースで勉強会を開催されるという。参加者が一人だろうと二人だろうと関係ない。指導教授との勉強会なのだ。もちろん参加させていただくこととなった。

ところで、当時の私は、フランスの専門的な文献を訳読するということについて、少しは上達していたものの、会話の能力も必要であろうとつねづね思っていた。そこで、大学内のフランス語会話のクラスに参加させてもらったり、御茶ノ水にあるアテネ・フランセに通うなどしていた。

その年のアテネ・フランセの夏期講習で、ペレ先生と出会った。ペレ先生は、アテネ・フランセで長年教鞭をとられた主任教授である。ペレ先生の講座は、とにかくエネルギーがすごかった。会話の授業だから、1時間の授業で何度も何度も指名されて、うまく話をするのができないと（ほとんどがそうだったけれど）容赦なく罵倒された。「カタストロフ！（Catastrophe !）」。

どうしてか、不思議と池田先生との勉強会のある日とアテネ・フランセの授業のある日とが重なることが多かった。ある日、ダイイ法の勉強会の

終わったあと、私は池田先生に、「このあとアテネ・フランセがあるのです、ペレ先生に習っています、授業ではなぜか私だけが道化のように痛罵されています、今日も宿題があり準備はしてきたのですが自信がないのです」などなど、辛い胸の内を明かした。すると、池田先生が宿題をみてくださるなんて予想もしないことが起きた。なんでも、池田先生も、かつてペレ先生に習われたとのことで、私の話になにかを熱く思い出されたご様子である。私のノートには達意のフランス語が書き込まれていった。

池田ノートを手にして、その日のアテネ・フランセで、私は、確かにいつもよりうまく会話をすることができた。だから、ペレ先生からの攻撃は減った。「カタストロフ！」は無かった。けれども、どうにもつまらない。他人の言葉で話をしてしまった私は、全然楽しくない。「池田先生には申し訳ないけれど、次からは、また自分で宿題をしよう」、そう心に決めた。

\*

語学の勉強は、ときに辛いことがあるし、一人でしなければいけないことがらも多くある。そうではあるけれども、私の場合、語学の勉強の記憶は、甘くても、ほろ苦くても、いつも誰かと繋がっている。語学を通じて誰かと一緒に泣き笑いをした。私は、やっぱり、どうしても、人との思い出になる。

## 大学における英語学習の意味： 英語との心地よい付き合い方を見 つけよう

語学教育研究室  
古庄 智子

### 1. はじめに

皆さんは今までに自分が英語を学ぶ理由を考えたことがありますか。英語が入試科目の1つである以上、中学では「高校入試のため」、高校では「大学入試のため」というのが英語学習の大きな目標であったらと思います。大学に入学し、英語を専門としない学部の学生さんの中には「やっと英語から解放される！」と期待しておられた方も多いのではないのでしょうか。大学での英語は専門科目ではないのだから、「単位取得」が英語を学ぶ最たる目的となっている方も少なくないと思います。

そもそも大学ではなぜ英語の授業が行われているのでしょうか。今回は、前半では大学における英語の位置づけを理論と現実の両面から考え、後半では、自律的に楽しく英語と付き合える一つの方法として、情報メディアを利用した学習法を紹介したいと思います。

### 2. 大学における英語教育の位置づけ

英語教育の研究者たちの間では、第二外国語としての英語教育の目的について、長年にわたり繰り返し議論がなされています。最近の動向では、大学での英語教育の目的を「一般目的の英語」(English for General Purpose) と「特定目的の英語」(English for Specific Purpose) の2つに大きく分け、特定目的の英語は、さらに細かく分類され、それぞれの目的が明確に示されています。<sup>1)</sup>